日本食糧新聞 8月8日(月)

クトを始めた経緯は。 に栃木県で秋元パン店とし 詰を開発した。「救缶鳥」 秋元 当社は、昭和22年 の再購入と同時にヤマト運輸が回収、NGO日本国際飢餓機構を通じてコンテナで支援先に輸送する。特許製 2年間は非常食として備蓄し、賞味期限が1年を切る2年後に義援物資として飢餓に苦しむ国々に送り、国際 任鳥プロジェクト」が注目を集めている。

同プロジェクトは、3年の貸味期限を持つパンの缶詰「救缶鳥」を 業部の秋元信彦課長に同プロジェクト発足経緯、東日本大震災での支援活動について話を聞いた。(青柳英明) 法で防腐剤を使用せずにやわらかいパンを長期保存でき、缶には、 貢献に役立てるという仕組み。具体的には、企業、自治体、学校、家庭などで「救缶鳥」を2年間備蓄し、2年後 込むスペースを設けた。一救缶鳥プロジェクト」は、東日本大震災でも機能し被災者の命と心をつないだ。同社営 栃木県の製パンメーカー、パン・アキモトが展開する非常食の備蓄と国際貢献を同時に行うことができる「救 「救缶鳥」プロジェ の声をきっかけにパンの缶 て創業し、平成7年に阪神 淡路大震災発生時に被災者 害にあったス がメッセージ のは、スマト 栃木県の学生 リランカの日 ラ沖地震の時 の元になった 方、スマトラからは、中古 コストがかかるからだ。一 詰は、分別ゴミとなるため の要請があった。パンの缶 ものに切り替えるから、古 が迫っていた商品を新しい 期にパンの缶詰を納品して 本人学校関係者から当社社 応えられなかった。同じ時 庫がなく、その声に十分に 長に、パンの缶詰の支援要 いた自治体から、賞味期限 当時、中越地震の支援で在 請があったことに始まる。 い商品を処分してほしいと 義援先の人たちに向けてメッセージを書き き、パンの缶詰のリユース 大ロットでの販売だった。 コストの問題から、企業、 を開始した。当初は、回収 ヤマト運輸が国内配送を担 として送るシステムの展開 下取りし、海外に義援物資 に着目し、約4年前に販売 という声があった。日本で は役立つという点に気づ はゴミになっても、 缶詰を2年後に

「パン缶詰」で非常食 備蓄と国際貢献両立

をクリアし、当社が製造し、 っていた輸送コストの問題

顧客よりも個人が増加して 始動した。現在では、大口

KDDIの協力を得て、a uの中国地区の各店舗でパ いる。 昨年の9月からは、

約7000缶が集まった。 ころ、多くの賛同者を得て 物資とする提案を行ったと ルを送り、被災地への支援 団体などにダイレクトメー 「救缶鳥」を購入した企業、

理解と協力で、ネックとな トが2年前の9月9日から



のため、当社社員40人がバ

自治体など大口顧客限定で 餓対策機構などが、支援先 した。震災発生直後、数千 ルが届いた。返信したが連 アキャン「救缶鳥プロジェクト」に注目 する一救缶鳥」プロジェク ことを決断すると同時に、 当し、NGOの日本国際飢 の状況把握や、輸送を担当 | 救缶鳥プロジェクト

など広がりを見せている。 ンフレットの配布と「救缶 のあっせんを開始する 被災地の方の反応はどうだ 一を手に

いただいた。ボランティア う言葉をかけられた。また、 りの救缶鳥です。いつかと ができた。それはauさん まった。でも、私には宝物 ただくつもりなどなかった 流されて何もなくなってし 南三陸町の方からも手紙を の人に会って見たい」とい からもらったメッセージ入 から「私は、津波ですべて 石巻の被災者のおばあさん た。皆さまから預かった支 まの "想い" を背負うこと があまりに多いので、皆さ が、支援金を送るという声 接届ける活動を継続して行 イチゴや牛乳を被災地に直 援金で、救缶鳥や栃木県産 プロジェクト」を立ち上げ 東日本大震災義援・救任鳥 を決断し「届け続けるぞ! いう声が多く寄せられたと 秋元 当初は支援金をい た。「救缶鳥」プロジェク サンリオさまから話をいた 缶」を作り仮設住宅に届け みを行っている。さらに、 クトの今後の方向性は。 新しい動きとしては、子ど にパンの缶詰を届ける取組 ありがたかった。 もたちに笑顔を届けたいと しょ!イラスト入りパン 秋元 最近は、仮設住宅 「ハローキティとい 「救缶鳥」プロジ

携してプロジェクトを展開 構のHPで公開している。 っている。活動の状況は連 する、日本国際飢餓対策機 支援先の人たちの雇用が促 海外支援先で、 クルシステムを構築して、 はないと感じている。特に 缶のリサイ

れた。放映以降、同社の取 宅にも1軒1軒回って支援 スで行き、避難所や仮設住 組みを見た視聴者から、激 新しい出会いや見えてくる を行った。行動することで、 4月12日、TV番組「ガイ ヤの夜明け」で取り上げら ことがあると実感した。 一こうした取組みが、

送るので活用してほしいとどの反響をいただき本当に 励のメールが殺到した。そ ティアでパン製造を助けた いとの申し出など、驚くほ 送っていただく方、ボラン 中から毎月決まった金額を 0万円を届ける方、年金の また、当社に直接現金20

> ような取組みができればと 進され、収入に貢献できる

力を得て進めていければと

さまざまな企業・団体の協 けでできることではない。 考えている。ただ、当社だ

した岩手県大槌町の被災者

は、東日本大震災でも機能の方から当社に感謝のメー 缶の在庫分を被災地に送る 絡が取れないので、大槌町 まで行き直接お会いした。